

審査の結果の要旨

氏名 黄 麗輝

本研究は前言語期における健聴児と難聴児の音声発達過程の特徴および音声発達に関連する認知の発達やコミュニケーション行動の特徴を明らかにするため、音響分析を行い、統計学的に解析しました。同時に補聴開始月齢の相違により、難聴児の音声発達にどのように影響を与えるかについて検討し、下記の結果を得ている。

1、過渡的喃語は聴覚のフィードバックによらない音声活動であることが明らかとなった。高度難聴の乳幼児でも過渡的喃語があり、逆に、過渡的喃語があっても、難聴が存在しうることを示した。難聴児の早期発見にあたっては、たとえ喃語があっても安心せず、難聴が疑わしい場合、早期に聴覚の精密検査をする必要があることが示唆された。

2、健聴児と難聴児の音声発達の違いの一つとして、難聴児の標準的喃語の出現時期が健聴児より著明に遅れることを明らかにした。標準的喃語の開始年齢は音声の発達を評価する重要な一つの指標として見なすことが適切であると考えられた。

以上から難聴児の早期発見、早期療育にあたっては、難聴と喃語の関連、喃語の種類についての正しい認識が必要であることが示唆された。

3、指さし行動は音声の発達にも関連していることが明らかとなり、音声の発達を評価する一つの指標として有用であると考えられた。

4、難聴児の早期補聴群が後期補聴群より、よりよい音声発達を遂げることが明らかとなった。難聴児の早期補聴・早期療育にあたっては、生後早期に出来れば8ヵ月以内に開始することが望まれる。

5、早期補聴により、補聴器の装用がしやすく、視線によるコミュニケーションが早く出来ることは、良い音声の発達に促進する条件であると考えられた。

以上、本論文は音響分析を行うことを通じて、統計学的に解析することから、前言語期における健聴児と先天性高度難聴児の音声発達過程の特徴および音声

発達に関連する認知の発達とコミュニケーション行動の特徴を明らかにした。またさらに補聴開始月齢の相違が難聴児の音声発達にどのように影響を与えるかについても明らかにした。本研究は難聴児の前言語期の音声発達の問題点を解明することによって、聴覚スクリーニングにて超早期に発見される難聴乳児の早期補聴、早期療育へのための科学的根拠を与えることに重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。